

海原一面に白く泡立つ波が台風の接近を知らせていた。ホテルの送迎バスが慌ただしく、宿泊客を港へと送っている。

診療所の窓からその様子を眺めながら、所長の浜崎幸男はまさきちちおはホッと息をついた。

夏の観光シーズン。島は観光客であふれ、診療所も住民の診察より観光客のケガや急病などの処置に追われる。年中行事の台風の季節に入ると、島も診療所も静寂を取り戻す。

自治医科大学を卒業して島のドクターとなつて帰って以来、繰り返される光景だ。

妻で看護師の良恵よしえが、珈琲カップをのせたトレイを所長室に運んできた。二人でゆっくりに珈琲タイムを過ごすのも久しぶりだ。

その時、診療所のドアが開いて、東京の女子大生という三人が駆け込んできた。その一人が三日前に海辺を自転車で走っていて転倒、足にケガをして診療所で治療してあげた。

「お世話になりました」。女子学生は礼を述べ

ると、ちよつと小首を傾げて聞いた。

「先生、この診療所、サッチー診療所って看板が架けられていますけど、サッチーというのは何という意味なんですか」

「人の名前なんだよ。この診療所の生みの親で私の命の恩人。そして、看護師さんのお母さん」

良恵も頷く<sup>うなず</sup>。女子学生たちの目が輝いた。

「何か、とつても感動的なドラマがありそうですね。来年の夏、また来ます。そのとき、くわしく聞かせて下さい」

手をふって車で港へ向かう三人を見送る幸男と良恵の脳裡にセピア色の島の風景が広がり、自転車で駆ける若き日の「サッチーセンター」の姿が甦った。

◇

ラジオは、例年より早い大風<sup>おおかぜ</sup>（台風）の発生を報じていた。先触れの潮風に煽られるようにして、葬列は岬を巡る道を登ってきた。

「馬がいなくなくと霊が引き戻される」。島の言

い伝えに従って、シズは刈り取ったばかりの  
青草を母屋の裏手にある厩うまやに投げ入れた。  
シズは、野良着についた草切れを払って厩  
を離れ、葬列に手を合せている幸代ちよのそばに  
歩み寄った。  
「八十三まで達者でいたんじゃから、タミお  
婆も悔いはなからう。三味線はお棺に入れて  
あげたんじゃろうか」  
「シゲヤんが三味線は形見に置いとくと言う  
てたな。島一番の三味線の弾き手がおらんよ  
うになると、寂しかなあ」  
野良仕事を終えた夜、月明りに照らされた  
縁先でタミの三味線と島唄に合わせて歌い踊  
る。半農半漁の忙しい日々の労苦をひと時  
忘れさせる村人の宴は、月が山陰に隠れるま  
で続くのが常だった。  
タミは、さつま芋を背に帰る途中に転び、  
足を痛めて畑仕事ができなくなっただけから急に  
衰え、臥せる日が多くなった。三味線の音も  
途絶えていたが、幸代が訪ねると布団から半

身を起こし、集落の小さな噂話に笑い声を上げた。

息を引き取る二日前、幸代はタミの躰を起こして支え、三味線を抱かせた。皺のたるんだ指を弦に添えさせると、朦朧としていた意識が一瞬戻ったかのように、指が弦を弾いた。ベベン、ベンベン。か細い息とともに、唄の草切節が口から漏れ出た。

へいこうや　さいこうや　くさかりいこうや  
さまはあのみね　わしやこのみねに　まねき  
あわせて　くさきろう〜

働き者だった連れあいと、朝露にぬれた草を刈った日々が甦ったのか、タミの顔に笑みが浮かんだ。枕元で息子の茂が、武骨な手で目をこすった。「おっかあ、三味が弾けてよかったなあ。サッチーセンサー、おおきに」

幸代は、陽射しを覆い始めた雲を見上げた。「大風がこんうちに浜のヨシお爺とヨネお婆、ハッチちゃんを回って学校に寄ってくる」

自転車の前カゴに聴診器などを入れた鞆を

乗せ、岬の陰の小さな家並へと駆け降りた。  
ガジュマルの太い枝が屋根のようにおいかぶさる離れの一間で、老翁が上半身裸の背を丸めて草鞋を編んでいた。  
「ヨシお爺、精が出るね」。戸口から声をかけると、老翁は顔を上げ、ほとんど見えないであろう濁った目を向けた。血管の浮き出た手をさすってやると表情が和んだ。  
「昔は、この手で村相撲の大関を張っていたんだよね」。しばらく老翁の若いころの武勇伝に耳を傾けたあと家を出て、石垣沿いにヨネの家に向かう。ヨネは、待ちかねたように、「これどうじゃ」と、鉛筆でノートに書きつけた句をみせた。  
「馬の背にユリの香ゆれて畑帰り」  
「よか句や。さっそく新聞に投稿せんとな」  
「褒めてもろうた礼にお茶入れるから、ちょっと待ってて」  
竈かまどでお湯が沸く間、幸代はヨネの胸に聴診器をあて、指で脈をはかる。本や新聞をよく

読むヨネに俳句を勧めたのは幸代だった。天真爛漫なヨネの句は、新聞の読者歌壇に度々採用されている。「また、よか句をつくってな」ヨネの家から初枝の家に戻ると、誰もいなかった。島の妊婦は臨月でも仕事に出る。ガジュマルの防風林を抜けた砂浜で、初枝は姑のトメと青海苔を蓆むしろの上に干していた。幸代は、従順で辛さを口に出さない初枝を氣遣いながら、丸く突き出した腹に手をあてた。「ハツちゃん、初産だから無理したらいけない。くれぐれも重いもんは持たんようにしてな。トメお婆も血圧がちよつと心配やから、塩辛いもんは控えて」潮風が強まり、サトウキビ畑が、波のように葉を揺らせている。石垣を高く積み上げて、台風への備えは怠りないが、ケガや急病に備えて消毒液や薬を用意しなければならぬ。幸代は、養護教員として勤務する高台の小学校へ向かって、自転車を押す手に力を込めた。

幸代の暮らす御風島みかぜじまは、南の洋上に連なる

薩南諸島の一つで、四千人ほどの島民が住む。周囲約四〇<sup>キ</sup>の三角むすびのような形をした島のそれぞれの一辺に、中の浦、東の浦、西の浦と三つの集落が固まっていた。本土鹿兒島と結ぶ貨客船の船着き場のある中の浦に御風村の役場や郵便局、雑貨店、医院などがあり、最も多い約二千人が住む。中の浦を挟んで東の浦に千三百人、西の浦に七百人と住み分けていたが、サトウキビの葉が風に舞う風景も、半農半漁の島民の暮らしも一つに溶け合っていた。幸代は、新しい御世となった昭和二年、東の浦で代々農家の羽嶋<sup>はしま</sup>家に生まれ、両親に兄と姉、弟という家族の中で育った。高等小学校に上がった十二歳の頃、女の職業もいろいろとあることを知り、看護婦の白帽と白衣に憧れをもった。高等小学校を卒業する時、担任の女教師に思いのたけを打ち明けると、成績抜群の幸代に期待をかけていた教師が看護婦への道を調べてくれた。

明治以降の医学の進歩とともに病院の整備が進み、看護婦の養成も急がれていた。医科大学などの看護婦養成は入学資格が高等女学校以上であるため、教師は幸代に鹿児島病院の看護婦養成所に進む道を勧めた。一男の兄弟は、いつか兵隊にとられる。おなごも嫁にいくまでは畑仕事や。父親の作治は幸代の看護婦志望に渋い顔をしていたが、兄の伸雄が「これからはおなごも専門的な職に就く時代や」と応援、姉の文代も「サッチーは頭のええ子やから、勉強させて」と力添えしてくれた。一都会は水も違うから、体に気をつけろ」母親のシズの涙声に見送られて、幸代は貨客船で鹿児島に渡り、桜島と向かい合って建つ南郷病院の看護婦養成所に入学した。折しも昭和十六年十二月八日のハワイ真珠湾攻撃で日米決戦の火ぶたが切られ、病院も戦時体制の緊迫した状況にあった。養成所の修業年数は二年。即戦力の看護婦



を養成するため厳しい指導が課せられたが、幸代は生理学、解剖学といった医学知識から看護法、消毒法、包帯法、救急法といった実技を懸命に学び、晴れて十六歳で看護婦の資格を得た。南郷病院の外科病棟に配属された幸代は、新人ながら医師からの信頼も厚く、大きな手術にもよく指名された。執刀医の傍に立ち、メスや鉗子<sup>かんし</sup>をてきぱきと手渡し、医師の手足となつて難手術を何度も体験した。戦線の拡大とともに病院の医師も次々に召集されていったが、幸代は、中園耕一という若い外科医に特別な想いを寄せていた。いつも笑顔で患者と接し、丁寧な中園の診察に幸代は尊敬の念を強め、いつしか初恋に似た想いを深めていた。あるとき、幸代が病室から看護婦の控室に戻る途中、空いていた診察室で中園が机の上に大きなカエルを置いて、メスを手に手術の練習をしているのを目にした。気付いた中園

が「あ、サッチャー、ちよつと手伝って」と手招きした。胸のときめきを抑えて傍によると、「押さええていて」と、カエルを幸代の手のほうに差し出した。幸代は「はい」と、カエルを仰向きにして押さええた。

「ほかの看護婦はカエルが可哀そうだとかいって、いやがるんだけど、サッチャーはさすがにプロ根性があるね。これはカエルではなく、命の危機に瀕している患者だと思えば、可哀そうなどとは言えないはずだけどね」

中園は、快活に話しながら、カエルの腹にメスを走らせた。それから何度も、二人でカエルやネズミで手術の練習をした。中園は幸代にもメスを握らせ、切味を試させたが、幸代の巧みなメスさばきに、「サッチャーは、何でも器用だね」と舌を巻いた。

戦局が重大な局面を迎えた昭和十八年の暮れ、看護婦控室で一人深夜の当直に当たっていた幸代の前に、中園が思い詰めたような表情で現れた。

「ついに、召集令状がきた。明日、熊本の実家に帰って三日後に出征する。サツちゃんのことをずっと大切に思っていた。幸せになつて欲しい」

幸代は、嬉しさと悲しみが緋い交じる驚きで、張り裂けそうな気持ちを躰ごと中園にぶつつけた。

「どうか、ご無事で帰ってきて下さい。死なないでください」

中園は、幸代を強く抱きしめ、幸代の唇に唇を重ねた。中園はふるえる幸代の躰をそつと離し、溢れる涙の向こうに立ち去った。

戦況は急速に悪化、米軍の本土爆撃は激しさを増し、鹿児島市内にもB二九の大編隊が焼夷弾の雨を降らせた。病院も焼け、医薬品も底をつき、病院の機能はストップした。

昭和二十年八月、昭和天皇の玉音放送で戦争は終わり、国民は焼け野原に茫然と立ち尽くした。幸代は中園の生還を唯一つの希望に、病院の再建に力を尽くす決意でいた。

島の実家では沖縄戦で知覧から特攻出撃した兄の伸雄が戦死。姉の文代は無事帰還した。許嫁の村役場職員と結婚して家を出た。弟の正雄はまだ十四歳で、農業を継ぐには早い。幸代は、年老いた両親を気遣った。そんな中で、文代から思いもよらぬ知らせが届いた。村で東の浦の小学校の養護教員を探しており、看護婦の資格があれば県に申請して養護教員になれるという。幸代は意を決し、外科部長の松山義郎に中園を待つ思いと、島の小学校の養護教員を勧められていることを打明けた。松山は、帰島を強く促した。「無医村では、養護教員は子供だけでなく住民のためにも役割は大きい。中園君のことは、消息が分かり次第、必ず連絡する」幸代は、養護教員になる決意を姉に伝え、混雑する汽車で熊本の中園の実家を訪ねた。中園の母は、涙ながらに幸代に語った。「出征する前に、幸代さんのことを耕一から

聞きました。親身に患者さんに尽くす優しか  
お人で、無事生還したら結婚したいと。私も  
耕一の支えになってくれるお方がいるのを知  
ってうれしくて、耕一の無事を祈っていますが、  
戦争は終わっても消息がつかめんとです」  
幸代は、小学校の養護教員として島に戻る  
ことを告げ、「耕一さんの帰りを、島で何年で  
も待ちます」と母親に誓った。  
「耕一が出征するときに残していたものがあ  
ります」。母親は、座敷の床の間に置いてあっ  
た黒い鞆と白衣を手に抱えてきた。鞆の留め  
金を外すと、中には、聴診器、体温計、鉗子、  
ハサミ、ピンセット、包帯、絆創膏、ガーゼ  
がきちんと納められ、別の脱脂綿を敷き詰め  
た細長い木箱に研ぎ澄まされたメスと針、絹  
糸がしまわれていた。  
「耕一は、医者 of 七つ道具だというとりまし  
たが、私はね、幸代さん。これをあなたが持  
っていてくれたら、耕一が元気に帰ってくる  
気がするんですよ」

「耕一さんが帰ってくるまで、大切にお預かりします」。幸代は、母親から渡された中園の白衣を胸に抱きしめ、もういちど母親の手を固く握りしめた。

正式に養護教員に採用されて、幸代が東の浦の小学校に赴任したのは、終戦翌年の昭和二十一年の春。海を望む木造の小学校は児童数約三百人。教職員は校長以下十五人という規模で、保健室には、身長計と体重計、ガラス戸のついた戸棚に消毒薬や包帯などの救急用品と薬品が納められていた。

幸代は、中の浦の日高医院を訪ね、院長の日高国弘にあいさつした。日高は、慈愛の眼差しを若い養護教員に向けて言った。

「今は薬品をそろえるのもえらい難儀やが鹿児島の医大病院につてがあるから、必要最低限のものはなんとかなる。学校で足らんもんがあったら、とりにきたらよか」

学校の医薬品購入には医師の指導がいる。「ありがたいございます」。幸代は、思わず胸

の上で手を合わせた。  
島の子供たちは腕白揃い、生傷の絶え間がない。集落の住人も幸代を頼りにした。東の浦から中の浦の日高医院までは一日二往復する木炭バスで一時間ちよつとの距離だが、足の弱った年寄りにはきつい。急病人は漁船に乗せて運ぶこともあつたが、日高医院も六十歳を超えた日高医師と二人の看護婦だけで、重病人は三日に一度の貨客船を待って鹿児島病院まで運ばなければならなかつた。  
日高医師が年に何回か、払下げの軍用オートバイに跨って子供たちの健康診断や村人の診察に来てくれるのが救いだつたが、日常のケガや急な病の応急手当と、幸代は放課後や休日も自転車で集落を走り回つた。  
幸代は、病気になる生活環境づくりが大事と考え、年寄りや妊婦などのいる家をこまめに回り、食事や衛生面に気を配つた。看護婦時代に聴診器で心音や呼吸音、腸の振動音などを聴きわける訓練を積んだことも、住

人の健康管理に役立った。昭和二十二年には学制改革による六・三・三の教育制度への移行で、小学校に隣接して中学校が建設された。小学校の保健室は中学と共用の形となり、幸代の日々はさらに忙しさを増したが、一日として脳裡から離れないのは、遙かな外地の中園への想いだった。敗戦後の日本を統治したGHQ（連合軍総司令部）は、軍人、民間人合わせて六百六十万人に上る海外残留日本人の総引揚げを指令。米軍の輸送船も大量動員して、南方の島々や満州、中国から復員兵が続々と帰還した。しかし、日ソ不可侵条約を一方的に破って満州に攻め込んできたソ連軍に拘束された日本軍将兵の行方は、その数とともに一切の情報が閉ざされていた。一九四五年九月、ソ連共産党機関紙「プラウダー」が「五十九万四千人」の日本兵を捕虜にしたという記事を掲載、六十万もの日本軍将兵がシベリアに抑留されている事実が初め



て公にされた。  
へ耕一さんもシベリアに～幸代は、極寒の地  
で辛苦に耐える中園を思い、涙した。  
昭和二十一年十二月に引揚げに関する米ソ  
協定が締結され、ナホトカから第一陣の引揚  
げ船が舞鶴に入港、岸壁で待つ肉親と涙の再  
会を果たした。だが、昭和二十五年四月の信  
濃丸を最後に、ソ連は「日本人捕虜の送還完  
了」の声明を出し、「戦犯」の約二千五百人が  
残されたことを明らかにした。  
へ戦犯のなかに耕一さんも含まれているのだ  
ろうか。まさか、このまま終身刑に～絶望的  
な思いが、幸代の胸を塞いだ。  
幸代が島に戻って六年の歳月が過ぎていた。  
父親の作治は三年前に急逝。鹿児島の農業高  
校を卒業した弟の正雄が農業を継いでいた。  
昭和二十七年の六月、台風の接近で海がざ  
わめきはじめた日、幸代はタミお婆の野辺送  
りを見送った後、ヨシお爺、ヨネお婆、臨月  
の初枝の様子を診て学校に回り、台風に備え

て救急用品を用意した。  
翌朝から風雨が勢いを増し、学校は休校と  
なった。幸代は母のシズ、正雄と早めの夕食  
をとりながら、ギシギシと鳴りだした天井を  
見上げた。「この家も古くなったな。なんとか  
せんとな」  
シズが正雄に顔を向け、「サトウキビが心配  
やが、今年はいいい馬がいるから、キビの運び  
出しも楽になるな」  
正雄は、ちよつと頷いただけで、トビウオ  
の焼き身を箸の先でつついて、忙しく口に運  
んでいる。寡黙だった父親を見ているようで、  
幸代はフツと笑った。  
正雄が農業を始めるにあたって、西の浦の  
繁殖牧場から、骨格のたくましい栗毛の馬を  
買い与えた。耕運機もトラックもない時代、  
馬は最大の労働力だった。都会への憧れを顔  
に覗かせていた正雄も、集落のどの馬よりも  
馬力のありそうな馬を目にして、農業に打ち  
込む決意を固めた様子だった。娘たちを交え

た青年団活動が盛んに行われていたことも、島に留まる気にさせたようだ。幸代は、正雄が嫁を迎えるまでには母親と暮らす新たな住居を確保して、正雄に家を譲らなければと考えていた。その思いのなかに中園の面影が浮かんできたが、激しく屋根をたたく風雨の轟きが現実を引き戻した。やがて台風の渦が島を包み込み、暴風雨に煽られた波濤の咆哮と木々の悲鳴が孤島を揺るがせた。荒れ狂う闇の中で、幸代は急病人が出ないことを念じながら、まんじりともせず、台風の終焉と夜明けを待った。日付が変わって間もなく、激しく打ちつける風雨の轟きに交じって、玄関の戸をドンドンとたたく音が聞こえた。正雄が飛び起きて、玄関を開けた。初枝の亭主の繁蔵が、風雨とともに飛び込んできた。「サッチーセンサー、すぐきてくれ。赤子が生まれそうじゃ。ハツが苦しがつとる」幸代は素早く身支度して、往診鞆を小脇に

抱えたが、ただならぬ胸騒ぎを覚え、中園の母から預かっていた黒の鞆を掴み、繁蔵に「これ、お願い」と手渡した。ダンスにしまつてあつた中園の白衣も胸に抱き、雨合羽を頭からすっぽりかぶつて、吹きつける風雨に身を屈めながら、懐中電灯を頼りに暗い道を駆け下りた。ランプの淡い灯りの下で、初枝は脂汗を浮かべて苦悶に顔をゆがませていた。姑のトメが大釜の湯をたらいに移しながら、「逆子かも知れない」と、はち切れそうな初枝の腹に不安そうな目を向ける。シズも嵐のなかを駆けつけた。島のお婆たちは、みな産婆の心得がある。幸代は、切迫した状況に狼狽した。初枝は、子<sup>し</sup>痛<sup>かん</sup>のような症状に陥り、全身をけいれんさせ、意識を失いかけているのか、呼吸も定かではない。普通分娩が不可能なことは一目瞭然だった。帝王切開しか母子を救う途はない。それも一刻を争う。中の浦の日高医院まで初枝を馬車で運ぶ余裕はない。

「サッチーセンサー、ハツを助けてくれ」  
繁蔵が泣き声をあげた。  
幸代は覚悟を決めた。看護婦時代、鹿児島  
の南郷病院で何度も出産に立ち会い、帝王切  
開も医師の執刀の様子を目の当りにし、その  
手順も頭に刻みこんでいた。  
へ耕一さん、助けて〜幸代は中園の白衣を身  
に着けた。長すぎる袖をまくりあげ、鞆から  
メスと鉗子、ピンセットをとり出し、大釜で  
煮立つ熱湯に浸して消毒した。  
「帝王切開しかなか。提灯でもランプでも灯  
りになるもん、ここにおいて」  
繁蔵が両手に提げてきた提灯を、初枝のま  
わりに並べた。停電で用をなさない頭上の裸  
電燈に懐中電灯を紐でくくりつけ、初枝の腹  
の真上に吊り下げながら、繁蔵に「正雄に馬  
で中の浦まで走って、日高先生にすぐきてく  
れるようお願いするよう言ってきた」と急ぎ  
たてた。  
「トメお婆、出血と羊水をこれで吸い取って」

トメにガーゼを手渡した。トメは、箸をガーゼで包んで、初枝の口に嚙ませた。「ハッちゃん、頑張つて」。幸代は、灯りの落着くのを待って、気合を込めて、初枝の腹の臍へそと恥骨の間にメスの刃を入れた。初枝が苦痛のうめき声を上げるが、暴れるようなことはしない。皮膚から皮下脂肪に深くメスを入れて縦に一五センチ切り開く。その下の薄い筋膜を切り除くと、最初の目印となる赤い二本の腹直筋ふくちよくきんが現れた。躊躇する時間はない。並んだ腹直筋の間に慎重にメスを進める。薄い腹膜を切り開くと、胎児を宿す子宮に到達した。子宮を包む漿膜しょうまくを鉗子で剥がして、茄なすびのような形をした子宮の下の細い部分に眼をこらした。この部分はメスを入れても出血が少ないことを学んでいた。胎児を傷つけないよう神経を集中して子宮筋層をメスで横に切り開く。羊水で満たされた卵膜らんまくのなかに頭を上にした胎児の姿が見えた。

へ生きていて〜と念じながら卵膜をピンセットで破り、羊水と一緒に胎児をそっとすくいあげ、トメに手渡した。臍の緒をとるとか細い産声が上がった、トメが「生きとる。よかつた」と涙をふきだしながら、産湯に入れた。「ハツ、りっぱな男の子じゃあ、わかるか、ようがんばった」。トメの呼びかけに、初枝はわずかに笑みのようなものをみせたが、口を開いたまま身動きひとつしない。

幸代は子宮内の出血が予想外に少ないことに安堵しながら、すばやく胎盤や卵膜などの内容物を取り出し、絹糸で子宮筋を縫合して、応急の止血措置を行った。

ホッと大きく息をつく幸代の額の汗を、シズが手拭いでふいた。その時、幸代は不思議な感覚にとらわれた。頭の中に自分以外の人間がいて、その人の指示でメスを進めたような気がした。幸代は白衣を脱いで、胸に抱きしめた。「耕一さん、ありがとう」

今度は、嵐のなかを裸馬に跨って走る正雄

の姿が目には浮かんだ。へあの馬なら、必ず正雄を中の浦まで連れていってくれる。嵐はようやく静まった。早暁の薄日が雨戸の隙間から射し込むなかで、幸代は日高医師の到着をひたすら待ち続けた。台風一過の朝陽が夜明けを告げる時刻に、オートバイのエンジンの音が聞こえ、日高医師が駆け込んできた。日高は、初枝の脈をとり、出血を補うリンゲル輸液を注射。幸代が応急措置した縫合部分を変更して丁寧な縫い合わせのあと、安堵の表情で言った。「麻酔もなしに、このメスでオペを。それにしても見事な腕前じゃ。ベテランの医者でもこうはうまくいかんぞ。出血が少なかつたのがよかった。意識を失っていたことも幸いしたな。一番の幸運は、オイが来る前に腕のよか医者がいたことじゃな」初枝のそばで血の気を失っていた繁蔵が荒い息を吐いた。



「もうダメかと思うとつた。地獄にホトケとは、こがんことを言うんじゃない」  
手を洗って戻った日高が、表情を引き締め  
て言った。  
「大事な話をしておかなければならん。奥さんと赤ちゃんが救われたのは、幸代さんの神技のような力によるもの。島の医者としてオイも感謝している。しかし、だ。こうした手術は、医師免許のある者以外はしてはいけんことじゃ。今日のことはこのオイがすべてやったこと。幸代さんはあくまで、助手として立ち会ったことにしなければいかん。絶対に他言無用、よかな」  
初枝の枕元の全員が、頷いた。「お心遣い、ありがとうございますごじます」。幸代は、心からの感謝の気持を込めて日高医師を見送った。  
幸代はそのまま初枝の容態を見守り続けた。昼前になって、初枝が「痛い」と顔をしかめながら目を開けた。  
「ハツちゃん、頑張ったね」。幸代の問いかけ

に、初枝は「オイが子は」と首を上げた。  
「ほれ、元気な男のじゃあ、でかしたぞ、ハ  
ッ」。トメが、産着につつまれた赤子を初枝に  
差し出した。初枝は、涙で頬を濡らしながら、  
赤子の小さな手を愛おしそうになでた。  
初枝は順調に回復、赤子も初枝の乳を音を  
たてて吸い、元気な泣き声を上げた。学校か  
らの帰りに立ち寄った幸代に、繁蔵が嬉しそ  
うに言った。  
「こん子の名は、サッチーセンセーの名前か  
ら一字もろおて幸いに男、幸男ちおと決めたんじ  
ゃ。助けてもろうた恩をいつまでも忘れんよ  
うにせんとな」  
「そんなことは、言わん約束じゃろうが」  
幸代は、唇に指を当てて繁蔵をたしなめた。  
その後も幾つかの台風が島に暴風雨を浴び  
せて通り過ぎたが、大きな被害はなく、平穩  
に年が改まった。

NHKのテレビ放送が始まった昭和二十八  
年の春、学校は新学期の華やいだ空気に包ま

れていた。保健室のガラス戸をノックする音に振り向くと、校長の瀬川久幸がこわばった顔で入ってきた。後ろに、この集落にもよく姿をみせる中の浦の駐在所の巡査と、目つきの鋭い二人の男がいた。

「警察の刑事さんが」と言う瀬川を制するようには、年配の刑事が「羽嶋幸代だな。医師法違反の容疑で家宅搜索する」と、幸代に搜索令状を突きつけた。あ然と立ち尽くす幸代に刑事は「心当たりはあるはずだ」と厳しい目を据えて、保健室の机や戸棚を開けて中をあらためた。

「これから自宅を搜索する」。若い刑事を保健室に残して、年配の刑事と駐在所の巡査は学校を出ていった。

「ちよつと話してもいいかな」と、瀬川が刑事に断って、幸代に言った。「鹿児島警察本部にあなたを告発する匿名の投書があつたそうだ。難産の出産に立ち会つたことは聞いていたが、まさか、こんなことになるとは」

幸代も初枝の出産の顛末が集落にじわりと広がっているのは感じていた。日ごとに可愛さの増す幸男を抱き上げる度に、幸代への感謝の気持ちたちがタブーの言葉となつて、繁蔵やトメの口から漏れ伝わったのだろう。それにしても、洋上遙かな鹿児島警察本部まで誰が。幸代は神罰の鉄槌を感じ、崩れ落ちそうな軀を辛うじて支えた。

保健室の前に他の教員も集まり、一様に驚愕の顔を向けている。「お騒がせして、申し訳ありません」。幸代は瀬川に詫び、外の教員にも頭を下げた。その時、一番前にいた教頭の鶴岡勲の顔に薄笑いが浮かんでいるのを、目の端にとらえた。

鶴岡は四十八歳ながら独身で、「女好き」と村人に噂されていた。集落の祝い事に便乗して焼酎を飲み歩き、酔いにまかせて娘たちを追いかけて、子供の母親に言い寄る不埒な振る舞いが輦ひん蹙しゆくを買っていた。

幸代も幾度となく「ひとり寝は寂しかろう」

と卑猥なことばをかけられ、鳥肌のたつおぞ  
ましさに嫌悪感を募らせていた。ある日、「娘  
が教頭に暗がりですら抱きつかれて、泣いとつた」  
と悔しがる母親の訴えに、幸代は鶴岡を厳し  
く戒めた。  
「教頭先生は冗談のつもりでも、娘たちは怖  
がって、心を傷つけられているんです。やめ  
てください」  
鶴岡はへらへら笑いながら「円満な人間関  
係を深めるための、英語でいうコミュニケー  
ションだよ」。以来、幸代は、鶴岡に絶えず厳  
しい視線を投げかけていた。教頭先生が私を  
警察に、幸代は唇をかみしめた。  
幸代の自宅の家宅捜索を終えた刑事が学校  
に戻ってきた。刑事の手には、中園の七つ道  
具の納められた黒い鞆が握られていた。  
「それは大切な預かりものです」。懇願する幸  
代に、刑事は「まだ自分の立場がわかってい  
ないようだな。これは犯罪行為を立証する重  
要証拠品だ。これから任意で事情聴取する。

駐在所まで一緒にきてくれ」

幸代は「母親に一度会わせて下さい」と頼んだが、「だめだ」と一蹴された。校門の裏に停めてあった古い乗用車に押しこめられ、幸代は中の浦の駐在所に連れていかれた。刑事は、幸代を椅子に座らせた、

「浜崎繁蔵の妻、初枝に帝王切開の手術をしたことは調べがっている。この鞆のなかの手術道具が何よりの証拠や」

幸代は、きっぱりと言った。「帝王切開をやったことは間違いないません。日高先生にきていただく時間がないと判断して、すべて私が勝手にやったことです」

「素直に罪を認めるとは殊勝なことだ。本格的な取り調べは県警本部で行うことになる。身の回りの品だけ届けさせるから、必要なものを書け」。刑事は、鉛筆と紙きれを机の上に置いた。

夕刻、正雄がふるしき包みを抱えて、駐在所に入ってきた。「ごめんな。おつかさんのこ

と頼むね」。幸代が声をかけると、正雄は無言で頷き、背中を向けて出て行った。刑事が、ふろしき包みの中を改めて幸代に渡した。着替えと一緒に握り飯と卵焼き、干魚を包んだ竹籠が入れてあった。

「いいおっかさだな。船に乗る前に飯を食べてもらおうか」。駐在所の巡査の妻が「座敷で食べなされ」と障子を開けて幸代を居間に通した。幸代は、深く腰を折って感謝の気持ちを伝え、握り飯を喉に押し込んだ。

その時、入口で「サッチー」と呼ぶ声が聞こえた。中の浦に嫁いでいる姉の文代が、手提げ袋と白いコートを手に立っていた。

「正雄から聞いて、びっくりして」。中に入ろうとする文代を、刑事が「いま取り調べ中だ」と手で押しとめた。

「ふみねえ、オイは大丈夫、それよりおっかさんのことを」。幸代は刑事の肩越しに頼んだ。

「鹿児島はもう寒かやろう。このコートを持たせてやって」。文代は洗面用具などを入れた

手提げ袋とコートを刑事に託し、涙を抑えながら駐在所を出て行った。貨客船は早朝に鹿児島港を出て、飛び石のように連なる島々を順に回り、この島には三日に一度の割で夕陽の没する前に着く。黒砂糖や干魚など島の産物を積みこみ、乗客を乗せると夕闇のなかを出港、洋上で夜明けを待って幾つかの島に立ち寄りながら夕刻に鹿児島に着く。幸代は、薄暗い船室の隅に、文代から渡されたコートをかけて身を横たえた。波のうねりに船は大きく揺れ動く。幸代は、看護婦になる夢を胸一杯に膨らませて、初めて鹿児島行きの船に乗った日のことを思い起した。船酔いに苦しみなながらも、希望に満ちた船旅は忘れられない思い出として心に残っている。あの日の晴れがましい船出に比べて、刑事の監視の中で船倉に身を縮める惨めさに幸代は唇をかみしめた。初枝の帝王切開について、大それたことをしたという思いはあった



ものの、後悔はない。ただ、中園を待つわが  
身が罪人となったことへの呪わしい思いが、  
胸をしめつけた。  
船は夕暮れのなかを錦江湾に入り、鹿児島  
港に着いた。幸代は刑事二人に両脇を抱えら  
れるようにしてタラップを降り、待っていた  
車で県警察本部に連行された。  
取調室では、島から同行した二人の刑事と  
は別の捜査官が、幸代と向い合った。  
「昨年の六月、医師の免許がないにもかかわ  
らず、浜崎初枝に対して帝王切開の手術を行  
った。このことに間違いないな」  
幸代は「はい」と答えた。「医師法違反で逮  
捕する。両手を出しなさい」。捜査官は幸代の  
両腕に手錠をかけ、留置所に連れていった。  
幸代は、独房の扉が背後でガチャリと閉まる  
音に足がすくみ、思わず母の名を呼んで、か  
び臭い畳の上に崩れ落ちた。  
翌日、本格的な取り調べを受けた。  
「初枝の亭主が呼びにきたとき、あんたは手

術道具を持って駆けつけたというじゃないか。最初から帝王切開の手術をしようと思ってい  
たんだろう」  
「初枝さんの身に容易ならぬことが起きてい  
ると胸騒ぎがして、思わず出征したお医者さ  
んからお預かりしていた鞆を手にして駆けつ  
けました」  
捜査官は追い討ちをかける。  
「胸騒ぎでは理由にらんよ。素人の手術で  
取り返しのつかない事態になっていたかもし  
れない。業務上過失傷害、殺人未遂の容疑も  
免れないぞ」  
そして、思いもよらぬ言葉を浴びせた。  
「高い値の馬を弟に買い与えたそうだな。あ  
んたの俸給で買えるとは思えん。もぐりの診  
療で治療代を稼いでいたんじゃないのかね」  
幸代は屈辱よりも、警察本部に告発した人  
物の自分に対する憎悪の深さにたじろいた。  
「馬は黒砂糖を売ったカネや蓄えで購入した  
ものです。薬代も一切頂いたことはありません

ん。野菜や魚を届けてくださる人があります  
が、それはありがたく頂いております」  
幸代は、鹿児島地方検察庁に身柄を移され  
た後起訴され、鹿児島拘置支所で裁きの日を  
待つ身となった。  
離島の台風の最中、帝王切開で母子の命を  
救った養護教員が医師法違反で起訴されたニ  
ュースは関心呼び、新聞各紙が大きく取り  
上げた。「看護婦の資格をもつ養護教員がいた  
ことは、むしろ幸運だった」と、戦後の医師  
不足による全国の医療空白地の深刻な実態を  
特集で報じる新聞もあった。  
幸代の起訴が報じられた翌日、南郷病院の  
かつての上司でいま病院長となっている松山  
義郎が面会に訪れた。  
「先生にも病院にも大変なごめいわくをかけ  
ることをしてしまいました」  
涙ながらに詫びる幸代を、松山は励ました。  
「あなたは本当によくやってくれたと思って  
いるよ。病院にいるときも、その辺の医師よ

り、あなたの腕は確かだったからな。しかし、法律がすべてに優先する裁判では楽観は許されない。病院の顧問弁護士に弁護を頼みたいと思っっているんだが、どうだろう」

幸代は「よろしくおねがいます」と、嗚咽を絞り出した。

その頃、東の浦の公民館では緊急の住民集會が開かれていた。ぎっしりの村人を前に、繁蔵が幸男を抱き上げて声をふり絞った。

「見てくれこん子を。サッチーセンセーに救われた命や。神さんのような命の恩人を牢屋に入れるとは、罰当たりや」

東の浦校区の区長で村の議員も務める上田勝一が声を張り上げた。

「サッチーセンセーが、子供だけじゃなく、年寄りや病人のためにどれほど尽くしてくれているか、みなよう知ってることや。繁蔵の嫁のこともよくやってくれたと、オイは思うとる。サッチーセンセーの罪を軽くしてもら

う嘆願書を、裁判所に出そうじゃなかか」

どよめきが広がった。「そうじゃ、嘆願書や」  
「ぐずぐずしてはおれんぞ。いまここで署名  
して、すぐ出そう」「筆と硯の用意じゃ」  
勝一は、中の浦と西の浦の区長にも協力を  
頼んだ。島の住人のほとんどが署名した嘆願  
書は、区長の勝一が船で鹿児島まで運び、鹿  
児島地裁の係官に直接手渡した。  
満席の傍聴の中で、幸代の初公判が開かれ  
た。検察官が起訴状を朗読した。  
「被告人は、医師資格がないにもかかわらず、  
かねて用意していたメスら手術用具を使って  
帝王切開の手術を行い、妊婦や胎児の生死に  
かかわる重大な医師法違反の行為をなしたも  
のである。奇跡的な幸運によって、妊婦と胎  
児は命をとりとめたものの、看護婦として手  
術に立ち会ったことがあるという経験だけの  
無謀な手術の危険性は計り知れない。業務上  
過失傷害、または殺人未遂として立件される  
べき事犯であり、厳正な裁きを求めるもので  
ある」

幸代の弁護を引き受けた弁護士の益子宣夫は、幸代の献身的な地域活動を強調した。一被告人は、近くに医師のいない地域で、病気の予防に重点をおいた生活・環境改善に力を入れてきました。怪我の治療や、やむを得ない場合においてのみ投薬や注射をしたことはあります。これは看護婦として習得した技能を生かす許容範囲の治療行為であり、当然ながら投薬などの費用も一切受けとっていいことは、地域の住民すべてが証言しているところであります。」

その上で反論に転じた。

「台風が吹き荒れる中、医師を呼ぶ手段も時間もないなかで、母子の命を救う唯一の道は帝王切開しかなかったのであります。被告人が出征した外科医から預かっていたメスを握ったのは、母子の命を救う一心であり、その勇氣ある決断はむしろ讃えられるべきです。」

論告・求刑で検察官は、幸代に懲役二年を求刑した。日数を置かずに言い渡された判決

は、懲役一年執行猶予二年。判決の後、裁判長は幸代に真つすぐ目を向けて話した。「嵐のなか、全身全霊で母子の命を救った崇高な行いには感銘を禁じえません。法の厳正な裁きは受けなければなりません。判決の心をくみ取り、今後も地域の人々の福祉や健康増進に貢献されることを望みます」

幸代は深々と頭を下げた。裁判長の温情ある言葉とともに、島の人たちの嘆願書に込めた情愛が幸代の胸を熱くしていた。

「大変だったけど、日ソ間で抑留者の帰国について協議が進んでいるようだし、中園君が帰るまで希望を持って頑張ろう」

松山の励ましに見送られて、幸代は島に戻り、中の浦の船着き場で待っていた繁蔵のポンポン船で東の浦の漁港に着いた。幸男を抱いたトメら多くの村人が出迎えた。

「お蔭様で、早く帰ることができました」

一人ひとりに頭を下げる幸代に、トメが「早うおっかさんに元気な顔、みせてやらんば」

と促した。

「それではまた」。幸代は夕暮れの包みはじめた浜からの坂道を家へと急いだ。庭先で母親のシズが待っていた。幸代は細いシズの躰に顔を埋めて、声を出して泣いた。

翌朝、幸代は小学校で、校長の瀬川に迷惑をかけたことを詫びた。瀬川は「裁判長から温情ある言葉があったようだし、ひとまずよかった」とねぎらった後、表情をくもらせて言った。

「私はすぐにでも復帰してもらいたいと願っている。だが、あなたの復職には教員のなかにも慎重な意見があつてね」

幸代の脳裡に教頭の鶴岡の顔が浮かんだが、すぐに打消し、改めて頭を下げながら言った。「私も、教職に戻ることは許されることではないと思っております。弟を助けて、畑仕事に精出そうと考えております」

その後、バスで中の浦の日高医院を訪ねた。

「オイも出産証明偽造の医師法違反で書類送



検ということになったが、あなたの裁判の結果でこちらもお咎めなし。まあ、島でただ一人の医者が刑務所に入ったら、島民が困ると考えたんじゃないだろう」

日高はそう言って笑うと、耳よりな情報を口にした。

「あなたの裁判の後、村長が、東の浦に診療所を設けたいんじゃないが、来てくれる医者はおらんじやろうか」と相談にきた。県の医師会の知り合いに当たってみたところ、一人心当たりがあるということじゃ」

幸代は驚きの声を上げた。

「ホントですか。診療所ができて、お医者さんにきてもらうことができれば、こんなに心強いことはありません。日高先生のご負担も少しは軽くなられるのではないでしょうか」

翌日から、幸代は正雄の曳く馬車にシズと乗って畑に出た。村人が「サッチーセンサー、モンペ姿もよう似合とるがな」と冷やかす。「もうセンサーじゃなか。サッチーでよかが」

幸代は、笑顔で返した。  
サトウキビ畑で鍬の手を休めて、東シナ海  
の青い海原を眺めながら、幸代は中園のこと  
を想った。へ必ず帰ってくる。中園との再会を  
思い浮かべて、麦わら帽子の下の手拭いを、  
日焼けした顔の口元まで引き下げた。  
証拠品として押収されていた中園の手術道  
具の入った鞆や白衣は、船便で島に送り返さ  
れてきた。幸代は、押入れに大事に仕舞いこ  
んだ。  
しばらくして、区長の勝一が村人に「診療  
所建設」の朗報を伝えた。公民館そばに住民  
総出の診療所の建設が始まり、医師の住宅を  
兼ねた診療所が完成した。やがて、役場の公  
用車で銀髪に黒縁眼鏡の医師が到着した。  
「先生のご要望に沿いながら、順次、必要な  
ものを揃えてまいり所存です」。案内の村の助  
役が揉み手で説明。診療所の事務補助員とし  
て採用した竹田富子と、医師の食事や身の回  
りの面倒をみる主婦二人を紹介した。

「なんか、こわそうなセンサーやな」。村人は、遠くから診療所に目をやりながら、囁き合っていた。勝一の話では、医師の名は馬場龍男。年齢は六十代半ばで鹿兒島市内で開業していた内科医院を息子に譲り、悠々自適の生活に入ろうとしていたところを、御風島の診療所を打診され、了承したという。

「エラかセンサーが、はるばる来てくれたんじゃない。どこか体に悪いところはなかか、診てもらうだけでもよかから」。勝一は、声をかけて歩いた。

「オイが診てもらおう」。最初に診療所のドアを開けたのは孫の幸男を連れてトメだった。

「トメお婆、中に入って」。富子に呼ばれてトメは、「よろしゅう、お願いします」と腰をかがめて、馬場医師の前の椅子に座った。

馬場医師は、「歳は」と聞いた。「満で六十になります」。トメはツバを飲みこみながら答えた。

「どこが悪いの」「どここといって、悪かそこは

ありもさんが、血圧が高いといわれてまして」  
馬場医師は「とくに異常はないようだ」と聴  
診器を耳から外した。トメはほっと息をつき、  
幸男の手を強く握って診療所を出た。  
その後、何人かが診察を受けたが、「歳を聞  
いただけでなんもいわん」「黙って注射された」  
診療所から村人の足は遠のき、具合の悪く  
なった者は、これまで通りバスで中の浦の日  
高医院に向かった。夜、勝一の家に住人が集  
まった。俳句を詠むヨネが立ち上がった。  
「薬や注射では治らん病もあるんじゃ。心ん  
なかの心配事もちゃんと聞いてくれるのが、  
本当の医者じゃなかとか」  
そして、「オイがつくった俳句じゃ」と紙に  
書いたものをみんなにみせた。「笹の葉もア  
リにとつては助け舟」  
「サッチーセンサーは発動機も舵もついとら  
ん笹舟かもしれん。オイたちはちっこい島に  
這いつくばって生きるアリンコのようなもん  
じゃ。アリンコは大きな汽船にはのぼれん。」

オイたちには笹舟こそが助け舟じゃ」  
一斉に声が上がった。「そんなとおりや。サツ  
チーセンサーがこんようになって、ヨシお爺  
はすっかり弱って寝たきりや」「新しくきた養  
護のセンサーは、顔も見たことがなかな」「サ  
ツチーセンサーを学校に戻すよう、また、嘆  
願書を出そうやなかか」  
幸代の復職を求める声が高まるなかで、  
診療所の馬場医師が突然、富子らに「鹿児島  
に帰ってくる」と言い残して汽船に乗り込み、  
村長宛に「辞職届け」が送られてきた。また、  
小学校の教頭の鶴岡が、県の出張所の事務職  
へ転属となったことが、集落に恰好の話題を  
提供した。  
幸代は、開店休業の診療所にひとり気をも  
みながらも、謹慎の日々を畑仕事に打ち込ん  
でいた。そんな幸代を、シズは不憫な思いで  
見つめた。  
へ幸代も間もなく三十、生死もわからんお人  
を待ち続けるより、いい人がいれば、結婚さ

せたほうがよかじやなかろうか〜

秋が深まり、サトウキビの収穫を終えて一息ついていた幸代のもとに、南郷病院の松山院長から手紙が届いた。封筒を開いた幸代は一瞬息をとめ、早鐘をうつ胸を手でおさえた。

「中園君が元気であることがわかった」

途絶えていたシベリア抑留者の帰還が動いたのは一九五三年三月のソ連の最高指導者、スターリンの死に伴う恩赦。「戦犯」としての捕虜と一般人合わせて千二百七十四人の送還が決定され、その名簿のなかに「中園耕一」の名前が確認されたというのだ。

「帰還の日がはつきりしたら、また連絡する」

松山の手紙はそう結んでいた。

昭和三十三年の正月が明けて間もなく、松山から幸代に電報が届いた。

「ナカゾノクン ミツカアトノフネデイク」

幸代は、震える手で電報をシズに渡した。

「あと三日、おまえ中の浦の美容院に行ったらどうや」。シズは幸代の髪に目をやった。

「このままでよか」。幸代は、高鳴る胸の鼓動を鎮めるように、海からの潮風を深々と吸いこんだ。

夕陽のなかを汽船が汽笛を鳴らして近づき、幸代の待つ船着き場に接岸した。乗客の最後に茶色のコート姿の長身の男が降り立った。中園であることはすぐわかった。二人は無言で向き合い、見つめ合った。

「あのとときのサッチャンのままだ」

「もうおばさん。耕一さんもお変わりなくて」

「こつちこそ、いいおじさんだよ」

耕一が声を上げて笑った。

「十何年ぶりの再会の第一声がこれか」

「長い間お疲れ様でした。お帰りなさい」

幸代も泣き笑いの顔で最初に言うべき言葉を口に出した。

「映画のようにはいかんもんじゃな」。焦れつたような顔で待つ繁蔵のポンポン船で東の浦に帰った。公民館で大勢の村人が迎えた。

「こんな遠か島によろこそ。娯楽の少ないと

こじやから、何かと理由をつけて、飲み食いするのが島の習い。気にせんと上がって」

勝一が、中園と幸代を上座に並んで座らせた。期せずして島の祝い唄が湧きあがり、中園と幸代の披露宴の様相となった。

「センサー、後で隣の診療所を覗いてくれんかな」。勝一が、中園に焼酎を勧めながら遠慮がちに言った。ヨネが膝を乗りだした。

「カツよ。診療所のセンサーになつてくれと、はつきり頼んだらどうじゃ。そちらのセンサーが診療所にきてくれれば、サッチーセンサーと二人で万々歳や」

勝一の案内で中園は診療所に向かい、そのまま宿泊した。翌朝、中園は幸代の家で七つ道具の入った鞆と白衣を手にし、じつと見つめていた。

「大切なものを、勝手に持ち出してごめんなさい」。謝る幸代に中園は真剣な表情を向けた。

「これは、このまま預かってもらえないかな。また、島に戻ってきたい」



中園は、母親のシズの前に正座した。

「実は幸代さんと一緒に島の診療所で働きた  
いと思っ  
ていま  
す。その前  
に、幸代さん  
との結  
婚をお許  
しいた  
だきたい  
と願っ  
ていま  
す」  
不意の  
プロポ  
ーズに  
息をの  
む幸代  
に代わ  
つ  
て、シ  
ズが畳  
に手をつ  
いて言  
った。  
「ずっと  
ずっと  
とお待  
ちして  
たんで  
すから、  
こ  
れに勝  
る喜び  
はなか  
です」

正雄が、珍しく口を開いた。「オイたちのこ  
とは心配  
せんでも  
よかです。  
姉を鹿  
児島に連  
れてい  
きたい  
のなら、  
そうし  
たらよ  
か。サ  
チ  
ねえも  
遠慮は  
いらん」

「サッチー先生は村のみなさんに頼りにされ  
ている  
ような  
ので、と  
ても連  
れ出す  
ことな  
ど  
できま  
せんよ」。中園は、幸代に笑顔を向けた。  
「私は頼  
りにな  
らない  
笹舟と  
いわれ  
ていま  
るん  
ですよ」。幸代は恥じらいながら、やっ  
と中園  
の顔を見  
上げた。

「もう一度、診療所をみておきたい」

中園と幸代が診療所を覗くと、富子が雑巾

を手に掃除をしていた。

「正雄さんから、また診療所が始まるという話を聞いて、うれしくて。オイにもお手伝いさせて下さい。お願いします」

弾けるような富子の笑顔に、幸代はこれまでにない愛おしさを覚えた。青年団の集まりの後、いつも正雄が富子を家まで送っていることを知っていた。

夕刻、二人は浜辺へ降りた。陽は水平線に没し、半輪の宵の月が海を淡く照らしていた。

中園の腕が幸代を強く引き寄せた。出征を前にした夜に交わした初めての口づけからの長い別離。その寂寞の空白を埋めるように中園の唇が熱く幸代の唇を塞いだ。

幸代の閉じた瞼の裏に、朧な幻影が浮かんだ。月の光が満ちる海原を中園と座る笹舟が進む。幸代は、中園の胸に深く顔を埋めて、よせ返す波のざわめきに耳を澄まし、万里の海を吹き渡る風波の果てしない旅路に、二人の舟出を重ね合せた（了）

